

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520183
 研究課題名（和文）断簡・逸文・紙背文書の蒐集による「明月記」原本の復元的研究
 研究課題名（英文）Restoring the original form of a courtier's journal, Meigetsuki, through analysis of its fragmentary pieces, lost parts, and writings appearing on the reverse side of the paper
 研究代表者
 尾上 陽介 (ONOE YOSUKE)
 東京大学・史料編纂所・准教授
 研究者番号：00242157

研究成果の概要（和文）：藤原定家の日記『明月記』原本の復元を目指し、各地に大量に存在する明治期以降の古美術品売立目録を網羅的に調査し、細かく切断された原本断簡などの定家関係資料を蒐集し、従来の原本一覧を増補・改訂するとともに、新たに判明した『明月記』逸文については翻刻した。また、陽明文庫などに所蔵される『明月記』原本から剥離された紙背文書についても調査し、撮影した画像を研究成果報告書で公開した。

研究成果の概要（英文）：In order to restore the original text of Meigetsuki that Fujiwara no Sadaie wrote, I exhaustively checked lists of auctioned antiques since the Meiji Period, which have survived in a large quantity across various areas in Japan. By collecting sources associated with Sadaie such as fragmentary pieces of the original of his journal, I added new findings and revised a catalogue of Meigetsuki original texts. I also published newly discovered original parts of his journal in a printed form. In addition, I investigated the documents owned by Yomei Bunko (Yomei Archives), which appeared on the reverse side of the paper on which Meigetsuki original was written. I included the photographs of these documents here as part of my research results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：藤原定家、明月記、古記録、売立目録

1. 研究開始当初の背景

（1）藤原定家は歌人・古典学者として中世文学史上に大きな業績を残したが、同時に朝廷や撰閲家に出仕する官人でもあった。そのため、その日記『明

月記』には文化人としての活動のみならず、当時の朝廷周辺の動静や官人社会の故実についても記述されており、中世文学・中世史研究の第一級史料として極めて貴重なものと評価される古

記録である。しかし、そのテキスト自体については辻彦三郎による先駆的な業績（『藤原定家明月記の研究』吉川弘文館、1977年）や原本の部分的翻刻（『史料纂集 明月記』一、続群書類従完成会、1971年）などがあるものの、従来は写真などで公開され利用できる原本も極めて限定的であり、『史料纂集』の刊行も中絶したままである。そのため、研究論文等においては江戸時代の写本を底本として明治末年から刊行された活字本（国書刊行会本）を用いることが一般的であった。この活字本は写本を底本としているため、誤写や誤植に由来する問題点が多くあり、根本史料としては極めて不十分な状況であった。全体の註釈（稲村栄一『訓注明月記』松江今井書店、2002年）や訓読（今川文雄『訓読明月記』河出書房新社、1977～79年）も刊行されてきたが、共に活字本を主な底本としているため、テキストの妥当性には自ずと限界があった。

1993年以降、定家の子孫である冷泉家時雨亭文庫に伝来した約60巻にも及ぶ原本が『冷泉家時雨亭叢書 明月記』（朝日新聞社）として写真版で刊行された（2003年に全五冊で完結）。この公開の意義はまことに大きく、これまでも冷泉家から他所へ流出した部分的な原本は知られていたが、ここに至り長期間にわたる原本の様態を知ることが可能となり、ようやく『明月記』原本の史料学的研究と良質なテキストの利用が可能となった。

一方、定家が歌人・文化人として著名であるため、特に近世以降、『明月記』原本は茶掛けなどに重宝されて巷間に流出することも多く、一部の巻は細かく裁断されて断簡となってしまった。紙背文書についても、表面から剥ぎ取られて別個のものとして流通したものが多く、現在、冷泉家に所蔵される原本においても紙背文書の痕跡のみを伝える部分が見られる。古記録としては極めて特異な事情であるが、『明月記』において原本を研究しテキストの精度を高めるためには、巷間に流出した巻（現在までに二十数巻が知られる）や、細かく切断された断簡、剥ぎ取られた紙背文書の集成が基礎となる。

（2）研究代表者・尾上は、大日本古記録の編纂を担当するとともに、中世の古記録論について研究してきた。『明

月記』については、これまで十数年間、原本を底本とした読解を中世文学研究者と共同で試みつつ（『文学』及び『明月記研究』誌上に1995年以来連載中）、原本形態の時期による変化から定家の日記筆録意識を分析するなど、研究を継続してきた。これらの経験から活字本の問題点を強く感じ、原本断簡を集成することはテキストとしての信頼性を飛躍的に高めるために必要不可欠であると認識した。そのため、原本断簡や紙背文書の年代比定・翻刻も進めており、その知見を取り入れつつ原本断簡の集成を試み、『『明月記』原本及び原本断簡一覧』（明月記研究会編『明月記研究提要』所収、八木書店、2006年）などにその成果を公開してきた。

このような断簡集成を行なうなかで、明治後期以降のいわゆる美術品売立目録の中に『明月記』断簡がしばしば見えることに気付いた（定家の筆跡が茶掛けとして珍重されたため、茶道具や軸物に交じっていることが多い）。これまでの作業では売立目録類については網羅的に調査できておらず、現状では限られた機関においてごく小規模に調査した結果や、先学など第三者からの教示によるものに限られている。そのため、まずは各所に大量に残る売立目録を可能な限り網羅的に調査し、新たな断簡や紙背文書の存在を把握して原本の復元を進めていくことが、さらなる『明月記』テキスト研究進展のために急務であると考えに至った。断簡には真偽を含めて疑問点のあるものも見られるが、その判定も原本サンプルの増加により精度が向上することは間違いない。

売立目録類の点数は四千数百点以上にも及ぶため、従来、網羅的調査は困難であったが、2001年に都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』（勉誠出版）が刊行され、初めて明治末から近年に至るまでの売立目録の全国書誌情報が整備された。これにより、現存する売立目録類の全貌が明らかになったのみならず、どこの所蔵機関にどの目録が所蔵・公開されているかを知ることができ、効率的かつ網羅的調査を行なうことが可能となった。

また、定家と親交のあった著名人の書状などを見ていると、その裏面に墨影が確認できるものがしばしばあり、それらの一部は元来、『明月記』の紙背文書であることが判明した。このため、

様式 C - 19

紙背文書についても同時に集成する必要があると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、歌人・古典学者として中世文学史上に大きな業績を残した藤原定家の日記『明月記』について、諸所に大量に存在する売立目録の網羅的調査や、各地の史料所蔵機関の調査を通して、これまで進めてきた原本断簡所在情報のさらなる蒐集と翻刻を行なうとともに、近世に原本から相剥ぎされて散逸してしまった紙背文書の集成を新たに試みるものである。あわせて写本や部類記に引用された『明月記』本文についても調査して逸文の発見に努めることにより、『明月記』原本の形態的・内容的復元を図り、テキスト研究のさらなる深化を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、各地の文庫・図書館等の所蔵機関に出張し、売立目録や『明月記』原本紙背文書と想定される文書などを調査し、断簡・紙背文書・逸文を蒐集した。現地においてはデータ入力など調書を作成するとともに、売立目録については複写あるいはデジタルカメラによる撮影、文書や写本については焼き付け写真の購入などにより、史料の画像の入手に努めた。その後、これらのデータ・画像から断簡・紙背文書・逸文について分析し、それぞれの真贋をはじめ、本来原本のどこの部分に存在したものを解析した。

(2) 売立目録については、先述の都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』を基本台帳とし、重複を避けつつ網羅的調査を行なうように努めた。具体的には、大量の売立目録を公開している東京国立文化財研究所（本研究以前から一部調査済）・阪急文化財団池田文庫・西尾市岩瀬文庫・奈良国立博物館等を調査対象とし、関西・東海地方の機関については、もっとも所蔵点数の多い池田文庫を中心に目録を閲覧し、調査を進めた。

(3) 『明月記』原本から剥離された紙背文書については、従来の調査により、公益財団法人陽明文庫に十点が所蔵されていることが判明していた。そのため、これらの文書が主に含まれている「陽明文庫一般文書目録」掲載史

料について調査を継続して進め、『明月記』紙背文書であった可能性のあるものについては、写真撮影を行った。その後、それぞれについて、現在残る原本の、何巻の何紙めに該当するものかを考察した。

4. 研究成果

(1) 2009年度は、『明月記』原本伝来状況の把握や、逸文の蒐集のため、まず池田文庫所蔵の売立目録類を重点的に調査した。具体的には、同文庫所蔵の明治43年以降に刊行された売立目録の悉皆調査を進め、そこに収載されている『明月記』原本断簡や定家書状のほか、同じく定家の書写した古記録（『兵範記』など）・儀式次第、さらには『明月記』の紙背文書であった可能性のある同時代人の消息類などを電子コピーにより蒐集した。また同時に、日本古代・中世の典籍や懐紙、文書・記録などについても、関連するものとして蒐集に努めた。この年に調査を終えた売立目録は1457冊で、池田文庫所蔵分の四分の三以上に当たる。このほか、原本紙背から剥離された可能性のある文書についても、その所在状況の把握と、図録類の電子コピーなどによる蒐集を進めた。

(2) 2010年度は、引き続き池田文庫および奈良国立博物館所蔵の売立目録類を重点的に調査し、前年度と同様に電子コピーや写真撮影により関係資料を蒐集した。同時に日本古代・中世の典籍や懐紙、文書・記録などについても蒐集に努めた。この年に調査を終えた売立目録は合計1620冊（池田文庫分425冊・奈良国立博物館分1195冊）で、ひとまず両機関所蔵売立目録全体の調査を終えた。また、新たに存在が判明した『明月記』断簡等の史料翻刻に備え、一部の売立目録を再度精査し、内容の確認や文字の判読に努めた。

原本紙背から剥離された文書についても、昨年度に引き続き所在状況の把握と蒐集を進め、陽明文庫に所蔵される古文書数十点を調査・撮影した。

(3) 2011年度は、これまで未着手であった地方所在の売立目録類を重点的に調査した。具体的には、東北大学附属図書館、西尾市岩瀬文庫、名古屋市鶴舞中央図書館・同蓬左文庫、相

山女学園大学附属図書館、岐阜県図書館・同歴史資料館、大垣市立図書館、石川県立図書館、金沢市立玉川図書館、大阪府立中之島図書館、岡山県立図書館、岡山市立中央図書館、岡山大学附属図書館などの所蔵機関である。これまで同様、関係資料を蒐集した。

また、これまでの調査の成果として、新たに存在が判明した原本断簡のうち主要なものについては「売立目録にみえる『明月記』断簡」(『明月記研究』13号、2012年1月)において翻刻し、考証を加えて紹介した。また、以前に公表していた『明月記』原本断簡リストを大幅に増補改訂した「(増訂)『明月記』原本及び原本断簡一覧」や、「陽明文庫所蔵一般文書目録」掲載史料中の、『明月記』原本から剥離されたと考えられる古文書画像を集成した「陽明文庫所蔵『明月記』紙背文書」、さらには『明月記』以外のものをも含む定家関係資料および古代・中世を中心とする古文書・古記録・古典籍・肖像画・詠草・懐紙・短冊・金石文などの日本文学・日本史関係資料全般の売立目録における所在状況を示す「売立目録掲載史料目録(稿)」を作成し、それぞれを東京大学史料編纂所研究成果報告2012-7『断簡・逸文・紙背文書の蒐集による「明月記」原本の復元的研究』(2013年3月)に収載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 明月記研究会(尾上陽介他11名)、『明月記』(建仁三年十二月)を読む、明月記研究、査読無、13、2012、2～62、
- ② 尾上陽介、売立目録にみえる『明月記』断簡、明月記研究、査読無、13、2012、63～68、
- ③ 遠藤珠紀、尾上陽介、宮崎肇、『頼資卿熊野詣記』『後鳥羽院修明門院熊野御幸記』『修明門院熊野御幸記』紙背文書の紹介、鎌倉遺文研究、査読有、26、2010、95～110、
- ④ 明月記研究会(尾上陽介他12名)、『明月記』(天福元年六月)を読む、明月記研究、査読無、12、2010、2～63、
- ⑤ 尾上陽介、東京国立博物館所蔵『明月記』天福元年六月記について、明月記研究、査読無、12、2010、64～71、

[学会発表] (計1件)

- ① 尾上陽介、下郷共済会所蔵史料に見る中世の日記の姿、明月記研究会、2010年8月22日、下郷共済会鍾秀館、

[図書] (計1件)

- ① 尾上陽介、東京大学史料編纂所研究成果報告2012-7、断簡・逸文・紙背文書の蒐集による「明月記」原本の復元的研究、2013、132、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾上 陽介 (ONOE YOSUKE)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：00242157

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし